廉頗藺相如列伝と二つの主題（一）

杉山寛行

一

『史記』廉頗藺相如列伝は、廉頗・藺相如・趙奢・李牧という、四人の戦国期の趙の将軍を記録している。しかし、その目的はそれぞれの独自な個性を記録することにあるのではなく、むしろ四人の記録によって浮かび上がる人間のある側面を象徴することが目的であったように思われる。こうした面から眺めるなら、藺相如・趙奢・李牧はほぼ同一の主題のもとに描かれており、廉頗はそれら三人とは共通な面を有しつつ対立する側面をも持つ人物として描かれる。また趙奢伝に付録のようにして付け加えられた、趙奢の子趙括の記録は、これら三人とは対立した、換言するなら、三人の記録によって強調される主題を、逆の側から明らかにする機能を付与されている。この列伝のこうした主題を代表して表現するのは、太史公の論賛が触れる唯一の人物藺相如なのであり、趙奢・李牧はその変奏を受け持つ。廉頗・趙括はそれぞれのありかたでその主題を支えているのである。

しかしこの列伝の特異な点はその構成にある。藺相如・趙奢（及び趙括）・李牧の伝がほぼ独立しているのに対して、廉頗の伝はそれらの伝のあいだに挟み込まれるようにして存在している。『史記』の合伝の場合、一つの列伝のなかに幾人かの伝が合わせて記録してあったとしても、それぞれの伝は独立して描かれるほうが一般的であって、廉頗藺相如列伝はむしろ異例なかたちに属す。このことは、先に述べた主題とは異なった、いま一つの主題をそこからは読み取ることができる。

本稿は、もっぱらかたちの上から、以上の二つの主題を解明することを目的としている。

二

藺相如伝は大きく四段に分けることができる。

第一段では、藺相如が宦者の令繆賢の舎人であったことが述べられる。「舎人」とは、個人の家の雑務を取り仕切る食客であって、国家の役職を勤める者に比較するなら賤しい身分であることが示される。

その記事は二つの方面へと機能する。

一つは、廉頗との比較である。廉頗伝は既に「廉頗なる者は、趙の良将なり。趙の恵文王の十六年、廉頗、趙の将と為り、斉を伐ちて大いに之れを破り、陽晋を取る。拝せられて上卿と為る。勇気を以て聞こゆ」という短い文でもって開始し、しかもいったん中断して藺相如伝に繋いでいるのである。「趙の将と為り、城を攻め野に戦うの大功有り」て、「拝せられて上卿と為」った廉頗との差は明らかである。個人の家の雑務を預かる「舎人」に対して、「上卿」とは国政に携わる高官である。

今一つは、藺相如自身が事件の経過に従って、換言するなら段落の進展に従って、その地位を高めていくことである。物語の枠組みが構成されていく、という側面である。第二段で「和氏の璧」に関わる事件を経過すると、「相如を拝して上大夫と為す」と、藺相如はその地歩を占め、第三段では「西河」の地での盟会を経て、「拝して上卿と為す。位、廉頗の右に在り」と記されて、藺相如は一気にその位を登り詰め、廉頗より上位にまで至るのである。記された事件はもとより、藺相如の地位の上昇も段落を示すための標識となっているのである。このように見るなら、第四段が、藺相如にその地位を追い越された廉頗の怒りの言葉、「我、趙の将と為り、城を攻め野に戦うの大功有り。而るに藺相如は徒らに口舌を以て労を為し、而も位は我が上に居る」に始まることは、意味あることとみなされなければならない。「且つ藺相如は素と賤しき人なり」と廉頗が言い募ることも、段落の構成とよく対応していると言えよう。あらかじめ指摘しておくなら、この廉頗の言葉は、この段落末尾、廉頗の謝罪の語のうちの「鄙賤の人」が自らを表す語として廉頗自身によって用いられているのと皮肉な対応をさせられている。

それでは、このような明確な枠組みのなかでは、どのようなことが物語られようとしているのか。

第二段の内容を構成する事件は「和氏の璧」をめぐるものである。趙は楚の「和氏の璧」を手に入れるが、それを聞き知った秦が「十五の城」を条件に交換を迫ったことが、この事件の発端となっている。

この秦の申し出に対し、趙王は諸大臣に謀るが、一「計、未だ定まらず」。二「人の使いして秦に報ずべき者を求むるも、未だ得ず」と、事態は一向切り開かれない。これが冒頭である。ここでは諸大臣を代表する者として廉頗の名が記されていることが、記憶に留められるべきである。

続く部分は、事態を切り開くものとして宦者の令繆賢の提案と趙王の承認とが、その内容を構成する。繆賢は「臣の舎人藺相如、使いすべし」と趙王に提案し、理由を尋ねられるやそれに答えて説明をして、「宜しく使わすべし」と再度強く提案するのが、その前半部分。それを承けて、趙王が藺相如を召しだし、結局藺相如に使命を委ねるのが後半部分である。「趙王、是ここに於いて遂に相如を遣わし、璧を奉じて西のかた秦に入らしむ」という記事が、それを終結させる。

冒頭では、既に述べたように、事態は二つの難問によって阻害されている。一は「計、未だ定まらず」であり、これは「秦に予えんと欲せば、秦の城、恐らくは得べからずして、徒らに欺かれんのみ。予うるなからんと欲せば、即ち秦の兵の来たらんことを患う」という二つの方策のあいだに生ずるアポリアによって計がまとまらなかったのであり、それに対して、ここでは「璧を奉じて西のかた秦に入らしむ」という方策がとられたことが記されて応じている。二は「人の使いして秦に報ずべき者を求むるも、未だ得ず」であり、これには「遂に相如を遣わし」という記事が照応する。既に段落内部においても周到に、一に対しては「之の二策を均ぶるに、寧ろ許して以て秦に曲を負わしめん」と、また二に対しては「王、必ず人無くんば、臣願わくは、璧を奉じ往きて使いせん」と、廉頗自身の言葉によって照応させられている。

このような内容上のはっきりとした対応は、文体にも反映しているのであって、冒頭部分が地の文で構成されているのに対して、続く部分は、繆賢と趙王との対話、趙王と藺相如との対話で全体が構成されているところに、文体上のしかけが見て取れる。また繆賢と趙王との対話が時間の遡行を含み、趙王と藺相如との対話がまさに現在の課題をその内容とする、というところにも、明確な工夫が感じられる。

繆賢によって藺相如が使者に選ばれた理由は、彼自

身の言葉として明確に述べられている。「臣、竊かに以為えらく、其の人、勇士にして、智謀有りと。宜しく使わすべし」。藺相如が使者として相応しいのは、「勇」気ある士であって、それを「智」謀が支えているからだ、というのである。

第二段の末尾、秦から戻った藺相如に対して、趙王は「賢大夫、使いして辱められず」と称して、「相如を拝して上大夫と為」すが、ここで「賢」と言い「不辱」と言う部分は、後述するようにほぼ「智」と「勇」とに対応するといってよい。論賛自身が藺相如を評して、「其の智勇に処すること、之れを兼ぬと謂うべし」と「智」と「勇」とで表現しているのである。しかもその具体的な内容は、「藺相如の璧を引きて柱を睨み、及び秦王の左右を叱するにあたりては、勢い誅せらるるに過ぎず」、「勢い誅せらるるに過ぎず」誅殺されるよりほかはなかった、というのであれば、藺相如はここで死に直面したのであり、これも論賛が「死を知らば必ず勇あり」と指摘しているのに従うならば、藺相如はここで勇気を奮ったということになる。「相如、一たび其の気を奮うや、威、敵国に信ぶ」とは、これも論賛の言である。論賛によっても、「和氏の璧」に関わる事件での藺相如は、「智」と「勇」とによって表現されているのである。いな、むしろ「智」と「勇」とを「兼ね」そなえることの意味を、藺相如の言動によって象徴しているという方が相応しい。

更にここでは今一度、列伝の冒頭で廉頗が「勇気を以て聞こゆ」とのみ評されていることを思い起こす必要もあろう。廉頗も藺相如と同様に「勇」を以て評価されているのであって、しかも廉頗は「智」を以て評価されてはいないのである。

三

第二段の第三の段落は、事件が展開する空間を趙から秦へと移すことによって、明確な枠を構成する。

ここでの内容は、前段で指摘された「智」と「勇」とを具体的に展開してみせることである。

冒頭、「秦王、章臺に坐して、相如に見ゆ」。藺相如が璧を秦王に奉ずると、「秦王大いに喜び、伝えて以て美人及び左右に示す」。そうした秦王の態度に接して「相如、秦王が趙に城を償うに意無きを視」る、と記述される。しかし秦王には趙に対して城を代償としてわたす意思はない、と何故藺相如が見て取ったかという説明はここでは与えられず、読者には宙吊りに

される。それが明らかにされるのは事態が更に展開してからのことであり、しかも藺相如自身の言葉として明らかにされるのである。「大王は臣と列観に見え、礼節甚だ倨れり。璧を得るや、之れを美人に伝え、以て臣を戯弄せり。臣、大王の趙王に城邑を償うに意無きを観る」。冒頭の記述に対応させて、その理由を記述する。ここに至って、読者は初めて宙吊りになっていた理由を知らされ、同時に藺相如自身の言葉として聴かされることによって、藺相如の事態を見抜く明察さを理解することになる。

藺相如の事態を見抜く明察さを表現するための工夫は、次のような箇所にもみられる。藺相如が璧を柱に打ちつけて砕かんばかりの態度を示すと、秦王は謝り宥めて、城を与えようとする姿勢を示す。

「相如、秦王特だ詐詳を以て趙に城を予うるを為し、実は得べからずと度る」。以降、藺相如と秦王との間で「度る」の語が三度にわたって繰り返される。相手の心を読もうとする緊迫したやり取りを表現するのに、ほんの数行のうちに現れるこの「度」の語の連用は効果あるものとなっている。それらを通して示されるのは、繆賢によって藺相如が使者に選ばれた理由の一つ、藺相如の「智」であり、事件の後、趙王によって評価される「賢」である。

今一つの理由は「勇」であった。論賛で「死を知ればかならず勇あり」というのに対応させれば、藺相如が死に直面する場面は繰り返し描かれる。秦王との二度の会見、そのそれぞれにおいて、初回では「臣の頭、今、璧と倶に柱に砕けん」といい、二回目には「臣、大王を欺くの罪、誅に当たるを知れり」といって死を覚悟する藺相如を描写する。秦王が「今、相如を殺すも・・・」と続けて言うのも、藺相如が死に直面していることを強調する。

かくて第二段で藺相如によって表現されるものは、「智」によって支えられた「勇」であった、ということができる。

四

第三段で描かれるのは「西河の会」であるが、これも主題の側面から見るならば、第二段の変奏ということができる。

藺相如の「勇」は、盟会の最中、「五歩の内、相如請う、頸の血を以て大王に濺ぐを得ん」と死を覚悟して、秦王に迫る言葉に端的に示されている。また「左

右、相如を刃せんと欲す。相如、目を張りて之れを叱す」という文が続いて、これを支える。論賛はこの文を承けて、「秦王の左右を叱するに方りては、勢い誅せらるるに過ぎず」と評して、この時、藺相如が誅殺される以外に道はなかったとしている。そして「相如、一たび其の気を奮う」、すなわち藺相如の行動が死を覚悟した上での勇気を奮ったものであったことを指摘しているのである。

「勇」を際立たせるための工夫は、第三段にもいくつか見られる。第一は、冒頭の記述「其の後、秦、趙を伐ち、石城を抜く。明年、復た趙を攻め、二万人を殺す」である。先ず「其の後」は、前段との時間的不連続を示して、段落の独立性を示すものとしてある。「抜く」は完膚なきまでの秦の勝利を示し、「二万人を殺す」も秦の圧勝を示す記事であることは、第三段冒頭から、趙は秦の圧倒的な脅威に晒されていることが示されているのである。こうした状況下で秦から提案された盟会であったことが、「趙王、秦を畏れて行くこと毋らんと欲す」、「廉頗・藺相如計りて曰く、王、行かずんば、趙の弱く且つ怯なるを示すなり、と」というやりとりを一層深刻なものとして、危機の苛烈さを際立たせている。第二は、ここに「畏」「弱」「怯」といった類似し関連した語が多用されていることで、後の主題である「勇」と対比させられている。

今一つ注意を払っておくべきことは、「廉頗・藺相如計りて曰く」とあることで、「勇」という範疇の限りでは、廉頗、藺相如の二人は同類に扱われているのである。

こうした秦の圧倒的な脅威のもとにありながら、趙は二度にわたって藺相如の機転によって危機を脱するのである。「秦王、酒を竟るまで、終に勝ちを趙に加うる能わず」。藺相如の行動は、第二段と同様勇気ある智謀と集約できよう。

五

主題の展開という面から眺めるなら、趙奢伝も李牧伝も同様な形態をしている。

趙奢伝は大きく二段に分けることができる。

趙奢伝に先立つ記述は、廉頗、藺相如の和解によってもたらされた趙の内政の安定とそれに伴う戦功の記述であり、そこに「其の明年、趙奢、秦の軍を閼與の下に破る」という記述が突然挟み込まれている。時間の流れに沿って眺めてみるなら、第一段はここを起点

に時間を遡行し、第二段は直接この「閼與の戦い」を承けるかたちになっている。

前段では、趙奢が趙の田地の税を取り立てる地方の役人であったことを述べ、平原君との関係について記述する。趙奢は田部の吏として税を取り立てていたが、平原君の家では王族であることから納めようとはしない。そこで趙奢は法にてらして処分し、平原君の家政を司る者九人を処刑した。「平原君怒り、将に奢を殺さんとす」。このような危機的な状況下で、趙奢は平原君に修辞に盈ちた諫言をおこなうのである。ここでまた論賛の語「死を知らば必ず勇あり」を参照するなら、記述上明示されることがなくても、ここに描かれる趙奢の行動は「勇」と称することができよう。しかもその諫言を聴いた平原君は「以て賢と為す」のであれば、第一段で描かれる趙奢は、「趙王以て賢大夫と為す」藺相如と同じであると言える。因みに『史記會注考證』が引く李笠は「賢の下の大夫の二字、蓋し下文に渉りて誤り衍ず。時に相如、繆賢の舎人たりて、未だ大夫たらざればなり」として、「大夫」の二字が衍字であるとしている。そうであれば一層かたちのうえでも、趙奢伝と藺相如伝との類似性は高まることになる。

後段はやや複雑なかたちをしている。

冒頭は「秦、韓を伐ち、閼與に軍す」と記して、前段との時間的不連続性を示し、かつ既に指摘したようにこれに先んずる記述、趙の興亡を記す時間の流れに合流する。

続く段では趙王がこの状況に対する方策を廉頗、楽乗、趙奢に下問する。廉頗は「道遠く険狭にして、救い難し」と答え、楽乗も「対うること、廉頗の如し」であった。ところが趙奢は、廉頗と状況認識を同一にしながらも、それ故「将の勇なる者勝たん」と宣言する。三度のほぼ繰り返しの中で、趙奢は廉頗、楽乗と対比させられ、勝敗の帰趨は将軍の勇気によって決するのだとするのである。言うまでもなく、趙奢は閼與の戦いにおいて勝利をおさめるのであってみれば、「勇なる者」とは、趙奢自身のことに他ならない。

これに続く段は、二つの異なった記述が捻れ合いながら進行する。一つは趙奢の側からの記述であり、今一つは秦の側からの記述である。

秦の側からの記述は、「秦の軍、武安の西に軍す。秦の軍、鼓譟して兵を勒す。武安、屋瓦尽く振るう」に始まり、先ずその圧倒的な軍事力を描写する。兵の訓練によって屋根瓦が尽く揺さぶられた、という客観

的な描写の巧みさは、秦軍の強力さと自信とを描いて余すところがないばかりか、その前に打ち震える趙軍をも想像させる。敵が強大であればあるほど、それに立ち向かう趙奢の勇気は強調されることになる。次には一転して趙奢に歓待された間者の報告を受けて、趙を侮ることになる秦軍の記述が差し挟まれる。

一方趙奢の側からの記述は、先ず「軍事を以て諫むる者有れば、死せん」という謎のごとき軍令に始まる。秦軍の軍事力の強大さの記述に続いて、現実に一人の斥候が諫言をしたことによって、「立ちどころに斬られる。この間記述が秦軍の側と交互にたちあらわれることによって、サスペンスは螺旋状に一層高められていく。

趙奢の行動の意図は、第一には、軍令の厳しさを見せつけて、経済官僚から初めて軍を指揮することになった自分に対する軍内部の譁言を断ち切ることにあったであろうが、今一つは、今後諫言する者は死を覚悟した上での行為であることを確信できるという点にもある。物語は、「壁を堅くして、留まること二十八日、行まず。復た益々塁を増」し、相手をじっと伺った後、秦軍が間者の言を信じ趙を侮るや、「乃ち甲を巻きて之れに趨く。二日一夜にして至る」と速度をあげていく。この間相互に繰り返される秦と趙との記述は、趙奢の周到さを強く印象づけるものともなっている。

物語が死を覚悟して諫言をする人物を要求するのに対して、はっきりと呼応するのが「軍士なる許歴」であり、彼は「軍事を以て諫めんことを請う」。趙奢はその諫言を受け入れたうえで、軍令に従うことを要求し、許歴が処刑につかんとするのは、諫言が死を覚悟したものであったことの再度の確認にすぎない。趙奢が先のように許歴を立ちどころに斬りすてなかったことも、「後の令を邯鄲に胥て」と言うのも、軍令の遵守が目的ではなかったことを明らかにしている。

趙奢がこうした一連の行動を通じて趙を勝利に導いたのであれば、趙奢は単に勇気ある将軍であっただけでなく、藺相如らと同じく智慧に支えられた勇気を体現する人物として描かれている、といってよい。趙奢伝が、「趙奢、是こに於いて廉頗藺相如と位を同じうす」という記述で終わるのも意味あることといわなければならない。宦者令の舎人から出発した藺相如と、田部の吏から出発した趙奢と。二つの伝は、その主題においては同一の曲を奏でているといってよいであろう。

こうした主題の面からみるならば、勇気を奮って死

を覚悟しつつ諫言をおこなった許歴も、その策によって趙の勝利を導いたのであり、同一の主題を体現する者である。かくしてかたちの上からは、「趙の恵文王、奢に号を賜いて馬服君と為し、許歴を以て国尉と為す」と、趙奢と同一の扱いを受けて、物語を締めくくる。許歴の物語は、趙奢伝に含まれた変奏をうけもつこととなっている。

六

李牧伝は、藺相如、趙奢と同様な主題とかたちをもちながら、表層では「勇」に対立する「怯」がその軸を構成する。

李牧伝は、李牧が趙の北辺の良将であることを記載したうえで、先ず大きく二つの部分に分かたれる。

第一段は更に三つの部分にわけることができる。その冒頭部分は、李牧が匈奴防衛に当たりながら、その侵入の度ごとに戦おうとしなかったことを述べ、しかし味方の側には損失のなかったこと（「亡失せず」）を指摘する。にもかかわらず「匈奴は李牧を以て怯なりと為し、趙の辺兵と雖も亦た以て吾が将は怯なりと為」したとして、この段を終える。

次の段落部分は、趙王がこうした姿勢の李牧を責めるが、変わるところがないので、李牧を更迭し別な人物に交代させる。この間は李牧の時代とは対照的に、匈奴の侵入の度ごとに城を出て戦うが、しばしば敗退し、「失亡するもの多く、辺、田畜するを得ず」。

続く段落部分は、趙王はそこで再度李牧に要請する。しかし李牧は門を杜し、疾と称して受け入れない。趙王が更に強硬に起用しようとすると、李牧はそこにおいて初めて、従来のやり方を認めるという条件を趙王に承認させ復帰し、従来の方式を続ける。「匈奴、数歳得る所無し。終に以て怯と為す」。

敵からだけではなく味方からさえも「怯」と思われていながら、その内実はすぐれた将軍であることを、この物語は語る。しかも趙王とのやり取りからは、こうした態度が強い意志に裏打ちされたものであることが示される。表面憶病にみえる真の勇気。これも智勇兼ねそなえたものと言い換えることができる。

第二段では、以上の裏面からの勇気ではなく、積極的な勇気と智慧が示される。「辺士、日び賞賜を得るも、用いられず。皆な一戦せんことを願う」。消極策を採ったかに見える時期においても、李牧は「便宜を以て吏を置き、市租は皆な輸りて莫府に入れ、士卒の

費と為す。日びに数牛を撃ちて士に饗い、射騎を習わせ、烽火を謹み、間諜を多くし、戦士を厚遇し」てきたのである。辺士たちへの心配りは充分なされてきたのである。充分機が熟すのを待ち実施される戦略、そこにも智謀は窺えるが、同時に戦術にもそれは示される。準備を整えたうえで、李牧は「大いに畜牧を縦ち、人民、野に満」たしめる。「匈奴、小しく入る。詳り北げて戦わず、数千人を以て之れに委ぬ」。その結果大軍を率いて侵入してきた匈奴を完膚なきまでに打ち砕くのである。「其の後、十余歳、匈奴敢えて趙の辺城に近づかず」。

ここからも智慧に支えられた勇気の体現者としての李牧が浮かび上がる。

七

以上の部分からみるなら、廉頗藺相如列伝は、藺相如、趙奢、李牧によって共通の主題が奏でられているといってよい。論賛の言葉を使うなら「其の智勇に処すること、之れを兼ぬ」。父趙奢と「父子、心を異にす」と評せられる趙括は、智も勇も有さないものとして、藺相如、趙奢と対比されつつ記述される廉頗は勇をのみ有する（「勇気を以て諸侯に聞こゆ」）ものとして布置されているといえる。

ところで李牧の登場の仕方をここで確認しておこう。李牧伝に先んずる記述は、廉頗の魏への亡命とその死である。「廉頗、遂に魏の大梁に奔る」に引き続いて、「其の明年、趙は乃ち李牧を以て将と為し、燕を攻めて武遂・方城を抜く」とあって、李牧は初めて登場する。勿論李牧伝はそれを直接承けて語り始められる。しかし時間の流れを考えるなら、先に触れた部分は時間の遡行のうえで語られており、時間の上で直接対応するのは、先ほどの物語が終結した後、「趙の悼襄王元年」の紀年の下、再度「廉頗、既に亡れて魏に入る。趙は李牧をして燕を攻めしめ、武遂・方城を抜く」と語られる部分である。趙の紀年が丹念に記されながら、一気に「遂いに趙を滅ぼす」に至っていく部分である。

翻って考えてみれば、既に廉頗伝冒頭に「趙の恵文王十六年」と明確に紀年が記されて、廉頗藺相如列伝は開始されたのであり、その後も折に触れ紀年が記され、その限りでは時間の遡行はなく、歴史的時間として流れていたのである。藺相如、趙奢（趙括）、李牧のそれぞれの伝は、そうした歴史的時間の上に物語られていた、といっていい。とするなら、この歴史的時

間は、どのようなかたちを有し、それぞれの人物とどのように関連しあって、どのような主題を奏でているのか、それが次稿の課題となる。